先輩からのアドバイス

注釈を笑う者は、注釈に泣く

レポートや論文を執筆する際、意外と忘れられがちですが、とても重要な役割を担っているのが「注釈」です。注釈とは、レポートや論文の文中で、文献や史資料から引用・参照した時、出典や典拠などの情報を本文の最後（文末脚注）もしくはページ下部（脚注）に纏めてつけるものです。基本的には引用した箇所が載っている文献の著者名・『書名（論文名）』・出版社・刊行年・該当頁数などを記載します。もし、何かの文献から引用したのに注釈を付けなかった場合、その論文やレポートは盗作という事になります。最悪の場合、せっかく執筆した論文やレポートも盗作と見なされれば、どれだけ素晴らしい内容でも「不可」になってしまいます。

また、注釈を最後に一気に付けようと考えて、文章を書いている途中で注釈を付けない人が結構いますが、後になってどの本のどこから引用したのか探すのは、想像以上に大変な作業になります。特に卒論になると、引用する文献の数も膨大な数になるため、それらをいちいち覚えておくことは不可能でしょう（むしろ、その労力を論文の違う部分で使うべきです）。実際私の周りでも、卒論提出寸前にどこから引用したのか分からなくなって、大変な思いをした学生がこれまでにたくさん居ました。

このような大変な思いをしなくて済むためには、常にその場その場で注釈を付ける習慣をつける事が必要です。日々のレポートやゼミ発表時のレジュメなど、引用したらすぐにその場で注釈を付ける（せめて、「書名」と該当頁数だけでも）。最初は面倒で慣れない人もいるかもしれませんが、後で大変な思いをする前に、今習慣を付けておくことが、研究を進める上ではとても大切なことなのです。また、やっているうちに注釈を簡易化するテクニックを身に着けると、注釈を付ける面倒さは軽減されます。「論文・レポートの書き方」に関する参考書には、注釈に関する内容も記述されているので、それらを参照すると良いでしょう。

たかが注釈と思うかもしれませんが、それ次第であなたのレポートや論文の評価は大きく左右されます。注釈の付け方が分からないそこのあなた！今すぐ参考書を読むか、TA の院生や図書館に設置されている「学修相談窓口」に聞きに行ってください。後で大変な思いをしなくて済むように、今のうちに注釈を付ける習慣を付けておきましょう。

（人文社会科学研究科　院生）